

①はじめに

平和を求めるはずの宗教が、これまでの歴史の中で戦争にどう向き合ってきたのだろうか。「分断と統合」をキーワードに、西洋キリスト教社会における絶対平和主義、正戦、聖戦という戦争の形態を取り上げ、ユダヤ教からキリスト教に継承された平和思想について、旧約聖書の視点から概観する。

②旧約聖書における「平和」

旧約聖書において「平和」はシャーローム (שלום) で表されている。この語は、平穏無事という平安と同義であり、健康・長寿・繁栄・勝利・救いといった意味を包含している¹。相互関係で調和があること、望ましい状態を意味し、平和の契約とも深い関係をもっている²。

エゼキエル書 34:25 わたしは彼らと平和の契約を結ぶ。悪い獣をこの土地から断ち、彼らが荒れ野においても安んじて住み、森の中でも眠れるようにする。

詩編 85:8-9 主よ、慈しみをわたしたちに示し／わたしたちをお救いください。／わたしは神が宣言なさるのを聞きます。主は平和を宣言されます／御自分の民に、主の慈しみに生きる人々に／彼らが愚かなふるまいに戻らないように。

ヨブ記 25:2 恐るべき支配の力を神は御もとにそなえ／天の最も高いところに平和を打ち立てられる。

・シャーロームという語を使い、戦争の成り行きが「順調」であるという言い方もある。
(サムエル記下 11:7 「ウリヤが彼のところに入ってきて来ると、ダビデは、ヨアブは無事でいるか、(noun, m.sg.)兵士たちも変わりないか、戦いもうまくいっているか、と尋ねた。)」

・シャーロームが戦争の終結として、「平和」の意味で用いられている箇所もある。(サムエル記下 10:19 「ハダデゼルの家来であった王たちはみな、自分たちがイスラエルに打ち敗れたのを見て、イスラエルと和を講じ (Hifil.imp. 3, m.pl)、これに仕えた。)」

以下のイザヤ書では、平和の契約³の関係は神に根源があり、平和を施す存在であるゆえに、平和は神に従う正しい人に与えているが(イザ 32:17)、神に逆らう悪しき者には平和は与えられないもの(イザ 48:22)として描写されている。平和と救いが同義で使われており、イザヤ書 5:7 では捕らわれたイスラエルの民に良きおとずれを告げている。

イザヤ書 32:17 正義が造り出すものは平和であり／正義が生み出すものは／とこしえに安らかな信頼である。

イザヤ書 48:22 神に逆らう者に平和はない、と主は言われる。

イザヤ書 5:7 イスラエルの家は万軍の主のぶどう畑／主が楽しんで植えられたのはユダの人々。主は裁き(ミシュパト)を待っておられたのに／見よ、流血(ミスパハ)。正義(ツェダカ)を待っておられたのに／見よ、叫喚(きょうかん)。

イザヤ書 26:12 主よ、平和をわたしたちにお授けください。わたしたちのすべての業を／成し遂げてくださるのはあなたです。

平和と義は密接な関係にあることがわかる。義なる神は、神に従う者に平和を告げ、平和を備えられるのに対し、「神に逆らう者に平和はない、と主は言われる」(イザ 48:22)と述べている。神の民にとって神に従うことなくして平安が与えられないことを意味している。

イザヤ書 2:4 主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。

ミカ書 4:3 主は多くの民の争いを裁き／はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。

イザヤ書の言葉は戦争や武力ではなく、平和と農業、つまり人々の生活を支える活動の重要性を象徴している。剣や槍は鋤や鎌という平和的な道具に変わり、人々が戦うことを学ばない理想的な平和の世界が描かれている。

¹ Vgl. Theologisches Handwörterbuch zum Alten Testament, 2 Bde, JENNI, E. (Hrsg.), unter Mitarbeit von WESTERMANN, C., Art. שלום München/Zürich, 1994-2004.

² 野本真也「平和」、『新聖書大辞典』キリスト新聞社 1971 年 1199-1200 頁参照

³ 新約聖書のキリストによる契約は、「神との和解」と言われ(II コリ 5:17-21、エフェ 2:14-16)旧約聖書より明瞭に平和と結びついている。その和解とは、イエス・キリストを仲立ちとすることにより来るものである。救い主は平和の主であり、その福音は平和の福音である(エフェ 6:15)。

34:14 舌を悪から／唇を偽りの言葉から遠ざけ／悪を避け、善を行い／平和を尋ね求め、追い求めよ。
37:37f. 無垢であろうと努め、まっすぐに見ようとせよ。平和な人には未来がある。／背く者はことごとく滅ぼされ／主に逆らう者の未来は断たれる。
46:9f. 主の成し遂げられることを仰ぎ見よう。主はこの地を圧倒される。／地の果てまで、戦いを断ち／弓を砕き槍を折り、盾を焼き払われる。／「力を捨てよ、知れ／わたしは神。国々にあがめられ、この地であがめられる。」

詩編においては、平和が神との関係の中で神からの賜物として描かれ、人はそれを追求し行動することが求められている。不正や不義を正し、公正な社会を築くことこそが真の平和につながると訴え、人々はその実現に向けて行動することが求められている。

③詩編における神の怒りと義

神の怒りのテーマで基軸となるのが人間の罪への意識である。人間の罪は神の怒りを刺激する。神は罪を怒りという手段の中で報復をする。ゆえに怒りは神と人間の関係性の中で主題化されていくのである。その際に、怒りは神の反応を通して義を人間に知らされ、理由づけされる。個々の詩編の祈りの中で、神の怒りが叙述される内容の決定的な特徴は、人間の命は根本的に限りがあること、消滅的であることを教えている⁴。とりわけ詩編は、人間の死を直接的に言葉で表現するのではなく、神の怒りによって日々審判されて生かされていることを通して教えているのが特徴である。詩編 30 編の感謝の歌は、重い身体的な病から回復する個々の経験から作られている。

詩編 30:6 ひととき、お怒りになっても／命を得させることを御旨としてくださる。泣きながら夜を過ごす人にも／喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる。

詩編 30 編で祈禱者は、救済の日々を回想している。回想の中でこの祈禱者は、背後に教示的な神の意図を立てている。夕べに人は涙を流し、朝には喜びが迎える、といった物事が転換する表現によって、祈禱者に神の怒りは慈悲深く、有限的であることの確かめが表されている⁵。その他、この詩編は 6 節にある神の怒りから慈しみへの転換、8 節の神の慈しみから立腹し御顔を隠すという叙述にも、「現在の状態が転換」する表現が描写されている。詩編の中でこのような物事が転換する表現が使用される理由は、詩編は常に賛美を伴う歌であり、何度も主題が歌われる上で、繰り返し人々に聞かせるための手法であった⁶。

詩編 90 編では、人間の一生は数えられ得る日々として表現され、人間の肉体的な死から叙述されている。

詩編 90:7 あなたの怒りにわたしたちは絶え入り／あなたの憤りに恐れます。8 節 あなたはわたしたちの罪を御前に／隠れた罪を御顔の光の中に置かれます。

7 節以下で祈禱者は、一生は神から与えられ、神の応答の中で生かされるべきものであることが示され、祈禱者が神の怒りの中で、罪への問いかけをしている。そこでは罪 (יִצְרָא) について知覚した、個人 (私) の罪が取り上げられ、その罪は共同体 (私たち) としての罪が生じていることが指摘されている。神の怒りは人間に限界を与え、時間的な期限 (有限性) を教示するはたらきがある⁷。神からの知覚の背景には、神の怒りにおける人間の死すべき運命にある存在の教えが根ざしている。人間の一生の短さは、神の時間の光の中では一瞬なのである (4 節)。神の大きさ、終わりなき持続としての時間性は、人間の小ささとしての限界と有限性と対照をなして表現されている。現実世界の中で、こうした神と人間の視点における二重の問いかけが詩編 90 編 7～9 節に根拠づけられている。つまり神の怒りは、一方では神と人間との距離の知覚であり、他方で怒りは、神から人間への応答であり、人間の罪に対する神の反応なのである⁸。詩編全体を通して特徴づけられるのは、神の怒りは感情的であるというより、人格的である⁹。神の真実が人間によって裏切られたとき、それが人格的な反応となっている。神の前で人間は常に語りかけられて応答するという人格的な態度によって神と関わるのである。

神の怒りを理解する上で重要なのは、神の前で人間がどのように生きるべきなのかを問う視点である。神の怒りは、神と人間との距離を知覚する教えであり、そこから生きる上での知恵をもたらしている (箴

⁴ Vgl. JEREMIAS, *Der Zorn Gottes im Alten Testament*, 22.

⁵ 詩 103 参照。

⁶ Vgl. HOSSFELD / ZENGER, *Psalmen 51-100*, HthKAT, 69.

⁷ イザ 54:7-10 参照。 vgl. JEREMIAS, *Der Zorn Gottes im Alten Testament*, 135.

⁸ Vgl. JEREMIAS, *Der Zorn Gottes im Alten Testament*, 26; GROSS, *Zorn Gottes*, in: W. Beinert (Hrsg.), *Gott, ratlos vor dem Bösen?*, QD177, 73.

⁹ Vgl. HOSSFELD / ZENGER, *Psalmen 51-100*, HthKAT, 423.

言 1 章 7 節)。これらの洞察が詩編全体を通して、人間に与えられている個々の日々の価値を表す知恵の教えになっている。

マルティン・ルター『生と死について 詩篇 90 篇講解』金子晴勇(訳)、創文社、175 頁以下

「(中略) 人間は生から死への方で、つまり存在から非存在への方で常に考えるが、神の創造的業を信じる信仰者は死から生へ、つまり非存在から存在への方での見方を学ぶとルターは説いている。この生から死への方と死から生への方の対立は、「死のとげは罪である」(第一コリント一五章五六節)という自覚によって、つまり死の恐怖と戦慄を罪に対する神の怒りと自覚し、キリストをとおり、神の憐れみをとらえることにより、結びつけられ、元来は非連続であるものの連続となる。それゆえ「死のさ中であって生のうちにある」という弁証法的表現が生まれてくるのである。かかる実存的な弁証法的思考をこの詩篇講解の特徴とみなすことができるであろう。(中略)」

【補足】

詩編 90:12 生涯の日々を正しく数えるように教えてください。／知恵ある心を得ることができますように。

この詩編 90 編は、2020 年イタリアで 200 万部のベストセラーとなったパオロ・ジョルダノー著『コロナの時代の僕ら』(早川書房)に次のように取り上げられている。

「この祈りを思い出すのは、感染症の流行中は、誰もが色々なものを数えてばかりいるからなのかもしれない。僕たちは感染者と回復者を数え、死者を数え、入院者と学校に行けなかった朝を数え、マスクの販売枚数を数え、ウイルス検査の結果がでるまでの残り時間を数え、幾度も幾度も繰り返し数える日数がある。危機が過ぎ去るまでにいったいあと何日あるのか、だ。

でも、僕はこんな風に思う。詩編はみんなにそれとは別の数を数えるように勧めているのではないだろうか。われらにおのが日を数えることを教えて、日々を価値あるものにさせてください。あれはそういう祈りなのではないだろうか。僕らは人生のすべての日々を価値あるものにする数え方を学ぶべきではないだろうか。」

④戦争論の3つの類型(キリスト教・ヨーロッパ世界を基軸に)

- ・「絶対平和主義」Pacifism (4 世紀以前)
…戦争を否定し、平和の実現を使命とする主張
- ・「正戦」Just War (4 世紀以降)
…正義や平和を守るために必要最小限のやむを得ない武力行使のみを容認する主張
- ・「聖戦」Holy War (11 世紀以降)
…神の名において積極的に戦いをしようとする主張

④-1 絶対平和主義と初期キリスト教

キリスト教はミラノ勅令¹⁰が出された 313 年以前、信仰者が持つ基本姿勢として絶対平和主義を掲げていた。そのため、キリスト者が戦争に参加したり軍人になることはほとんどなかった。その背景にある理由は、ローマ軍に加わることが最終的に皇帝崇拝に繋がってしまうという認識があり、また戦いに加わることがイエスの教えである平等や平和思想に反するという考えが広く受け入れられていたためと考えられる。(皇帝崇拝 vs 平等・平和思想(キリスト教))

平和思想とイエスの言葉

マタイによる福音書 5:39 「悪人に手向かつてはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」

マタイによる福音書 5:44 「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」

イエスの言葉を反映しているパウロの言葉もローマ時代初期のキリスト者の行動指針となっていた。ローマ信徒への手紙 12:14f. あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。(中略) 愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。

絶対平和主義のキリスト者の行動原理は平等と平和思想にあり、イエスによる愛の教えに基礎づけられている。絶対平和主義者は、聖書、特に福音書に記されたイエスの言葉が圧倒的な価値規範となった。**正戦のはじまり**：キリスト教は 313 年にコンスタンティヌス帝によりローマ帝国の公認宗教。392 年にテオドシウス 1 世が(アタナシウス派)キリスト教を国教と定めた。これにより、キリスト教以外の宗教

¹⁰ ミラノ勅令(313 年)：ローマ皇帝コンスタンティヌス 1 世による勅令。ローマ帝国市民の信教の自由を保障した。

は禁止された。キリスト教は国家との関係で信仰形成が迫られる結果となった。特に外敵からの攻撃に対し、どのようにして国家を守るのか、という責任が自覚されていく。そこで、アウグスティヌス（354-430）などによって正戦論の基礎が築かれていく。結果的に、コンスタンティヌス体制以降のキリスト教世界において、絶対平和主義の考え方は主流から外れることを余儀なくされた。

④-2 正戦論とは何か？（現代の国際法理論の基礎）

313年のミラノ勅令以降、コンスタンティヌス体制のもとでキリスト教は社会秩序の維持に目を向け、特にローマ帝国への蛮族の侵入をめぐる戦いの必要性を認識した。このような時代状況の中で、聖書を参照しながらその課題を整理したのがアウグスティヌス（354-430）であり、彼は後の「正戦論」の基礎を築いた重要な人物となる。

アウグスティヌス（354-430）（参照『マニ教徒ファウストゥス論駁』）

（a）自己目的のために戦ってはならない。

→自分の命を守るために相手の命を奪うことは間違えであると考えた。

（b）他者を助けるためには戦う義務がある。

→国家は外部の攻撃から国民を守り、また不当に奪われたものを取り戻す義務がある。そして統治者は社会の平和を外敵から守るためには、武力を行使すべきだと考えた。

アウグスティヌスは、絶対平和主義者にとって影響力のあるイエスの命令を「心の問題」に移し替え、実際には悪への抵抗が「行動」として可能であることを主張しました。その背景として、アウグスティヌス自身が戦争を正当化する上で、イエスの言動が最大の障壁となっていることを認識していたことが挙げられる。

・「正しい戦争」のための基準

その後、トマス・アクイナス、マルティン・ルター、国際法の父フーゴー・グロティウス（オランダ法学者（1583-1645））らによって、正戦論は国際法理論の一部として整えられていく。

第一次世界大戦後、核戦争の危機の時代を迎え、国際社会の中で戦争を抑止する価値規範として、正戦論が再度見直されている。オバマ元アメリカ大統領が、ノーベル平和賞受賞（2009年）の際に、アフガン戦争を「正しい戦争（Just War）」とあえて正当化したように正戦論は今日も根強くある。

④-3 正戦論が求める諸条件 「正しい戦争とは？—「戦争への正義」と「戦争における正義」—」¹¹

正戦論（1）（2）事項）

日本は憲法上、平和主義を基本姿勢としているが、戦争に反対する立場だけでは国際社会における十分な戦争抑止力とはなり得ない。そのため、国際社会で広がっている正戦論の条件を理解する必要がある。これは、平和維持のためには理論的な枠組みも重要であることを示している。

（1）「戦争への正義」（*jus ad bellum*）：どのような条件が整えば戦争という行為に訴えることが正当化されるのかが主題。

⑦ 正当な理由：戦争をはじめするには、不当な暴力や攻撃から人々を守り、不当な形で奪われた権利を回復する理由が必要。

⑧ 正当な権威：戦争を始めることを決定する人物や組織には、人々によって了解された正当な権威が前提とされる。現代では、国際連合および国連安全保障理事会が正当な権威の代表格とされるが、イラク戦争¹²のように安保理決議を経ることなく遂行された戦争もある。

⑨ 比例性：戦争によって結果的に得られる善が、戦争でもたらされる悪にまさるという条件が必要。武力行使によってもたらされる結果（リスク）を計算する必要がある。

⑩ 最終手段：戦争は他の平和的解決が絶たれた場合の最終的な手段として選択されなければならない。どの条件で「最終」と見なすのかが困難であるが、武力行使決定の遅延によって事態を悪化させることへの危機感と平和的解決を巡る忍耐強さとの間の緊張感が常に存在する。

⑪ 成功への合理的見込み：成功の見込みのない無謀な戦いは、いくらそれが正当な理由を備えていても「戦争への正義」を持ちえない。ここでの「成功」とは軍事的な勝利の意味に限定されるのではなく、武力行使をしてまで獲得されなければいけない目的が達成されるかどうか重要な。例えばイラク戦争においては、地域の不安定化や宗教派間の抗争の激化、さらにはテロの拡大やIS（イスラム国）の誕生、難民の大量流出が生じたため、アメリカの行動を「成功」と

¹¹ マイケル・ウォルツァー『正しい戦争と不正な戦争』風行社 2008年参照

¹² イラク戦争（2003-2011）：アメリカが、イラクが大量破壊兵器を保持しているとして空爆および地上軍によって侵攻し、そのサダムフセイン政権を倒壊させた戦争。「テロとの戦争」の一環として、イギリスなどの「有志同盟」による軍事行動として実行した。アメリカは結果的に国連の支持を得ることなくイラク攻撃に踏み切り、国連の権威や有効性が問われることになった。

評価することはできない。

⑦**正しい動機**：軍事介入には正当な理由が存在する場合でも、その動機が適切であるかどうかを確認する必要がある。また、戦争が正当化されるには、最終的に平和の回復に繋がるものでなければならない。

(2)「**戦争における正義**」(jus in bello)：戦争中において、どのような条件を満たすべきかが主題。つまり戦争中の行為すべてが無条件に正当化されるべきではないため。

⑦**区別の原則**：武力行使においては、戦闘員と非戦闘員を区別することが重要であり、民間人や無関係な施設を攻撃することは許されない。原爆投下はこの原則に反する行為とされ、近年の戦闘でも高精度ミサイルによる攻撃でも非戦闘者への被害が国際的に非難される。

④**比例性の原則**：不正を正すためには必要以上の力を行使すべきではない。「戦争への正義」の条件として「比例性」が重視される。武力行使は必要最小限に留めるべきで、それを超えると戦いの動機が疑わしくなる。しかし、歴史的に見て多くの戦争では、勝利側の兵士による略奪や強姦が行われてきたため、戦後には中立的な平和維持活動(PKO)が必要となる。

これまでの戦争史でも、「戦争への正義」の条件を満たした事例は、きわめて少ない。本来は「限定された戦争」であった「正戦」のあり方が、「正義のために戦わなければならない戦争」と考えられるようになっていく。

⑤ 聖戦論とは何か？

⑤-1 旧約聖書における聖戦

旧約聖書における聖戦の思想は神の絶対的聖性に基づいており、聖戦は神に命じられたと確信して行う戦争を指す。古代オリエントでは、神(々)の導きに従って戦うことや、神の名のもとに戦争を行うこともあり、戦争と信仰は密接に結びついていた。そのため、戦争は人間同士の争いであると同時に、神(々)の代理戦争の側面を持っていた。このことから、戦争に勝利した神は名声を広め、敗北した神は名を失ったり、強い神に吸収されたりすることがあった。

神が戦争を主導する考え方は、旧約聖書においても読み取れる。その中には神の名のもとに敵を容赦なく攻撃すべきという考え方も以下の箇所にある。

申命記 7:2 あなたの意のままにあらわさせ、あなたが彼らを撃つときは、彼らを必ず滅ぼし尽くさねばならない。彼らと協定を結んではならず、彼らを憐れんではならない。
ヨシュア記 6:21 彼らは、男も女も、若者も老人も、また牛、羊、ろばに至るまで町にあるものはことごとく剣にかけて滅ぼし尽くした。
士師記 5:31 このように、主よ、あなたの敵がことごとく滅び、主を愛する者が日の出の勢いを得ますように。国は四十年にわたって平穏であった。

こうした古代世界にみられた聖戦論は、キリスト教には直接受け継がれなかった。この聖戦の類型は十字軍遠征の時代を境にして、キリスト教の中にも発現している。

⑤-2 十字軍の思想

神聖ローマ帝国時代には、終末思想が人々を聖戦へと駆り立てる時代精神として重要な役割を果たした。特に西暦 1000 年頃には、ヨーロッパのキリスト教徒の間で世界の終末や最後の審判に近いとされる終末論が広がり、この考えは新約聖書のヨハネの黙示録から影響を受けている。また、8 世紀のスペインにおいてイスラム勢力の侵攻などの大きな社会的変動があったことが、この終末観の広まりを一層促進した要因となっている。結果として、ロマネスク美術の誕生がこの時代の文化的表現において重要な契機となった。

千年王国：終末の日が近づき、キリストが地上を直接支配する千年王国の到来が近づいていると説かれている。千年王国に入るためには「悔い改め」が強調され、この至福の 1000 年の終わりにサタンが解放され地上に現れ世を乱す事態になり、ここに神による最後の審判が下される(黙示録 20 章参照)。

11 世紀のローマ教皇ウルバヌス二世(在位 1088-1099)はクレルモン会議で次のような演説(1095 年)がある。

ローマ教皇の呼びかけだけでは 10 万人にも及ぶ人々をエルサレムに向かわせることはできなかった。

かくて互いの間に平和を保つことを約したおん身らは、東方の兄弟たち、神に背く呪われた種族の脅威にさらされている兄弟たちを、救う義務を負っているのである。(ローランド・ベイントン『戦争・平和・キリスト者』143 頁)

ウルバヌス二世による十字軍の呼びかけは、異教徒によって聖地エルサレムが「汚染」されているため、

その「浄化」が必要であるという主張を含んでいた。また、多くの人々は世界の終末が迫っているとの感覚を共有しており、そのため十字軍に参加して救済を得たいという欲求があった。さらに、ルターは「トルコ人は肉体ももって現れた悪魔である」(『ルター著作集』第一集第九卷 40 頁)と表現し、ムスリム全般を指す言葉として用いて、イスラームを終末のアンチ・キリストに当てはめて解釈した。

⑤-3 十字軍が終わった後も十字軍の思想は形を変えて今日も残り続けているだろうか？

制度化された十字軍が終了した後も、キリスト教の絶対性を前提とする聖戦意識や十字軍によって呼び起こされた浄化志向が、必ずしも人々の意識から消滅することはなかった。しかもそれは、十字軍を否定したはずのプロテスタンティズムのほうに強く現れる。(山内進『十字軍の思想』157 頁)

十字軍の浄化志向は、カトリックにとどまらず、プロテスタントにまで受け継がれてはいないだろうか。例えば、浄化志向の現代版として、トランプ米国大統領による排外主義方針(移民の制限、白人至上主義の容認など)がある。

⑤-4 聖戦の特徴¹³

㊦聖戦は戦いを善と悪の闘争とみなす(自らを善、敵対者を悪とみなす)。善悪二元論が思考の枠組みになった場合、敵を徹底的に「悪魔視」することで、対立が激化する。しかし、この状態では正戦論における「比例性の原則」、すなわち「不正を正すために必要以上の力を行使すべきではない」という概念が無視されることになる。これは冷静な判断を欠いた行動を促進し、暴力行使を正当化する危険性を孕んでいる。

㊧聖戦は神聖化された絶対的な目的を追求する 正戦論にある戦闘員と非戦闘員の「区別の原則」がしばしば無視される。聖戦は特定の宗教集団の主導によってなされるだけでなく、国家(帝国)が疑似宗教的な力を帯びる場合もある(例：ナチズム、宗教的イデオロギーを国策の中心に置いた日本による大東亜共栄圏構想など)¹⁴。

㊨聖戦は世界を戦争状態として理解する 世界が戦争状態であるという認識が、暴力行為を正当化する道徳的根拠になる。戦争状態の構図を演出するために、しばしば黙示的終末論(この世の終わり観)が利用される¹⁵。

⑥ 平和を求め、なぜ戦うのか…グローバリゼーションとジハードは共存できるのか？

現代のグローバル化が進む中、社会は「宗教多元社会」へと変化しており、異なる宗教が共存し、お互いの価値観を認め合うことが求められている。しかし、各宗教の信念に基づく「正しさ」は、多元性に開かれる必要があり、他宗教からの「正義」を自己のものとして受け入れる態度も重要である。宗教内の「正義」が閉ざされると、不寛容や対立が生まれ、最終的にはテロや戦争を招く事態になる。したがって、異なる宗教や文化を持つ人々への関心を持たなければ共存は難しく、内集団と他集団を二元的に分ける考え方は避けるべきだろう。今求められるのは、非暴力的に関係を築くための「正義」の領域を広げることであり、他者を敵視せず、対話を大切にする姿勢が必要である。また、歴史を振り返り、無関心が引き起こしてきた戦争の歴史を理解した上で、その無関心から逸脱する方法を常に模索することが重要である。

¹³ 小原克博『一神教とは何か』平凡社 2018 年参照

¹⁴ 小岸昭『世俗宗教としてのナチズム』ちくま新書 2000 年参照

¹⁵ マーク・ユンゲンスマイヤー『グローバル時代の宗教とテロリズム』明石書店 2003 年参照